

# 「3℃の飯より君が好き」

作・鈴木アツト

2019年3月29日 第一稿 脱稿

第7回せんだい短編戯曲賞 最終候補作

登場人物

●女 34歳

●男 38歳

## 第1場

ここは、とある海が近くにある田舎の町。かつてはベッドタウンとして活気があったが、徐々に高齢化が進んでおり、街を歩いていると、杖をついた老人とすれ違うことが多い町。

冬の終わりの夕方、あるアパートの部屋。

シングルベッドと卓袱台とソファがあり、ソファには洗濯物が、いくつかは畳まれて、いくつかは畳まれないまま中途半端に置かれている。

客席から見えないところには、玄関、台所、浴室、トイレ、冷蔵庫、洗濯機、クローゼットがある。

客席側は、窓とベランダという態。

男がシングルベッドの上で、眠っている。玄関から鍵を開けるガチャガチャという音がする。女が入ってくる。

女の声「ただいま」

男「、、、」

女の声「ただいま」

男「(起きて)ん？おかえり」

女「(現れて)うー、さぶかった。あったかいね、うち」

女、バッグをソファに置き、コートを脱ぎながら、男を見ると、その寝癖が目に入る。男の片側の髪が垂直に立っている。

女「(呆れて)強風を感じるよ」

男「(冗談で返すように)だろ？」

女「どうやったらかんな、雷落ちたみたいな寝癖になるかね？」

男、寝癖を直す仕草。女、コートを脱ぎに、クローゼットへ。

女の声「今起きたの？」

男「うん、昼寝しちやって」

女の声「そろそろ準備する時間、じゃない？」

男「いや、まだ寝てていいんだよ今日は。あと一時間ぐらい。九時まで現場入れば大丈夫だから」

女「(現れて)ご飯は？」

男「まだ」

女「じゃ一緒に食べよっか」

男「え？作ってくれるの？」

女「君が作るの」

男「俺？でも俺これから仕事だよ」

女「寝てる時間はあるんでしょ？」

男「ご飯作るまでの時間は、ないなあ」

女「私に作らせたたってこと？疲れて帰って来たのに？」

男「違うよ、、二人で作ろうよ」

女「、、」

男「電子レンジで。君と、俺と、電子レンジで」

女「わかった。それでいいから」

男、ベッドから降りてくる。

女「やや怒って）ちょっと。部屋、汚くない？」

男「そう？いつもどおりじゃない？」

女「テーブルの上（片づけて）」

男「寝る前に勉強してて、（だから）」

ト、男、卓袱台の上の本や勉強道具をソファーに移動する。

女「洗濯物は途中なんだ？」

男「畳んでたんだよ。ちょっと、急に調べたいこと思いついちゃって」

ト、男、途中の洗濯物を畳み始める。

女「それで書けたの？詩の一つや二つは」

男「、、」

女「（溜息）はあ。着替えて来るからこっちこないで」

女、畳まれていた自分の洗濯物を持って、クローゼットへ去る。男、残りの洗濯物を畳む。

女の声「社長んところの孫と一緒にだね」

男「え？何が？」

女の声「よく事務所に来るのよ、小学生の孫。うち、事務所と社長の自宅が一緒だから」

男「ああ。それで？」

女の声「社長んところの孫はさ、事務所も自分んちの一階だからさ、もう、すぐ散らかしていくんだよね」

男「、、、」

女の声「社長がさ、おばあちゃんたちお仕事してるから片付けてって言うと、はいって、返事はするけどさ、三分で別の遊び始めてるからね」

女、部屋着姿になって戻って来て、

女「結局散らかす人って、一つのことを終わらせられないんだよね。途中で次々、興味移っていくから、前のことが、そのまんま残って、それで部屋が散らかっていくの。君の人生と一緒」

男、洗濯物を畳み終え、

男「(逃げるように) 何かあるかな？」

男、台所へ。

女「畳んだらしまつてよ」

男の声「、、、」

女「ねえ」

男の声「カレーでいい？」

女「、、、カレーなんかあったっけ？」

男、サラシラップに包まれた、凍ったカレーを二つ持ってくる。

男「あつたあつた」

女「いつのカレー？これ」

男「ちよつと待って。(カレーをよく見て) トマトが入ってる。君が作ったやつだ、俺の誕生日に」

女「え？もうずいぶん前のじゃない？それ」

男「一年は経ってないよ」

女「でも去年の四月でしょ？捨てようよ」

男「だから一年は経ってないから」

女「もう美味しくないんじゃない？」

男「え？すごく美味しかった記憶あるよ。君のトマトカレー」

女「冷凍って少しづつ味落ちてくんだよ」

男「君のトマトカレー、すごい美味しかったよ。味落ちても、まだまだ美味しいよ」

女「いやいやいやいや」

男「少なくとも普通のカレーぐらいだよ」

女「もう美味しくないよきつと」

男「まだ美味しいって。誕生日のやつだし捨てられないよ」

女「じゃあそれでいいから」

男、凍ったカレーを持って、台所に行きかけるが、

男「そうだよ！誕生日には毎年、カレー作ってもらおうかな？」

女「え？」

男「それで毎年、冷凍しておくんだ。カレーマルゴ―2020！とか、カレーラトゥール2030！って、ワインみたいに名前つけちゃったりして。この年のカレーコクあるなあとか。この年は甘みがいつまでも残ってるねえ、みたいなさ。寝かせてるうちにすごく美味しくなったりして」

女「腐るよ」

男「肉は腐りやすいだろうから野菜カレーにしようか」

女「（投げやりに）野菜だつて腐るわ」

男「夢がないねえ君は」

女「は？夢？」

男「夢があるだろ？毎年誕生日に君が作ってくれたカレーをコレクションしていったら」

女「ねえ、ねえねえ、、、いつ食べるの？」

男「え？」

女「そうやって取っておいて、いつ食べるの？」

男「そりゃあ、食べたい時に」

女「食べたい時っていつ？」

男「そりゃあ、お腹が空いた時だよ」

女「でもコレクションしたいんでしょ？」

男「そりゃそうだけど」

女「なんでいつも、とりあえず冷凍しようってするの？なんでそのままだつて思うの？」

男「俺は、こんな夢はどうでしょう？つてそういう話を」

女「私は、その日に食べてほしいって思つて、カレー作ってる。その日に君に、美味しいって言ってもらいたくて、カレー作ってるの」

男「、、先パツと、シャワー浴びてくる」

男、凍ったカレーを持って、台所に行きかける。女、ベランダの窓を開ける。風の音がビュービューとする。

男「え？」

女「え？暑くない？」

男「寒い」

女「空気入れ替えたいんだよ」

男「寒い」

女「君のシャワーの間だけだから」

男「せっかくシャワーで温まって出てきても、寒いじゃん」

女「我慢してよ、それぐらい」

男「もう夜だよ？体冷えるし。俺トイレ近くなると事務的に困るんだよ」

女「今だけよ。警備始まる前にちゃんとトイレ行けばいいでしょ？夜だって新鮮な空気吸いたいの、こっちは」

男「新婚旅行、ハワイ行きたいって言ってたよね？」

女「関係ある？今その話」

男「あるよ。暖かいほうが好きなのかと思ってた」

女「海が好きなだけ。海がきれいなら沖縄でもいいよ」

男「沖縄だって、暖かいじゃん。俺はちゃんと、エジプト行きたいって言ったからね」

女「エジプトか北欧って言ってたでしょ？北欧は寒いじゃん」

男「北欧は、オーロラを見たかったんだよ。寒いのは好きじゃないんだよ」

女、クシヤミをする。

男「ほら、君だって寒そうじゃない？」

女、クシヤミをする。

男「ほら！」

女「閉めていいよ」

男、ベランダの窓を閉める。ビュービューと吹く、風の音が止まる。

女「エジプトだってピラミッド見たかっただけでしょ？」

男「え？」

女「暑いのが好きで行くわけじゃないでしょ？」

男「まだ続くの？この話」

女「そっちが始めたんでしょ？大体、なんでピラミッドなのよ？あんなの、お墓でしょ？」

男「えっ？」

女「新婚旅行で他人のお墓見に行くの？墓ならこの辺に腐るほどあるわ！墓だらけだよ！この窓からだって見える」

男「ピラミッド。歴史のロマンがあるだろ？」

女「お墓なんか、見に行きたくない」

男「お墓って。ピラミッドを、お墓って。そこら辺の苔の生えたお墓と一緒にすんなよ」

女「古くて歴史あったって、お墓よ。新婚旅行で、前方後円墳見に行きたいと思う？同じよ」

男「前方後円墳より、高いだろ？そそり立ってるだろ？」  
女「そそり立ってりやなんでも（いいわけ？）」

女、クシヤミをする。

男「大丈夫？風邪じゃない？」

女「いつ行くの？新婚旅行」

男「まあ、その内」

女「と言ってもう、二年過ぎてる」

男「まだ、二年だよ」

女「新婚って。いつまでを言うんだらう？」

男「、、、」

女「（嫌味ぼく）五年？十年？」

男「、、、」

女「あつという間に」

女、男の頭から白髪を一本抜く。

男「痛っ」

女「白髪頭になっちゃうんだからね」

男「俺もこの間見つけたよ。白髪」

女「それは言わなくていいの」

男「今日はないね」

女「、、、」

男「抜いたの？」

女「それ、聞かなくていいの」

男「（白髪を発見した態）あつ」

女「ないから」

男、女の頭へ両手を伸ばす。

女「ないって」

男「（ふざけて）あつたよ」

女「ないの！」

男「（短歌を詠むように）新婚の白髪見つかる枕元 この幸せが永遠（とわ）に続かん」

女、男が髪の毛を一本、抜こうとするのを防ごうとして、男の両手を掴む。二人、両手を握り合う。しばらく、均衡している。女は男の手の温かみを感じている。が、

男「親指短いね」

女「え？」

男「ふふ」

女「また、人のコンプレックスを」

女、両手を離す。

女「どうしてそういうことばっか言うかね？」

男「いやいや、かわいい指だなあって思ってたんだよ」

女「気にしてるって何度も言ってるでしょ？」

男「好きなんだよ。その手の指も、丸っこい足の指も」

女「ちよっとやめてよ。気持ち悪いから」

男「本当だよ。本当にそう思ってるんだって。君の足の指好きだぜ」

女「(他人行儀に) ありがとうございます」

男、女の足の指を撫でる。

女「やめてって」

男「、、早く、決めなきゃね。どこ行くか」

女「エジプトは、嫌だな」

男「わかったよ」

男、台所へ。

女「どこ行くの？」

男の声「インドは？」

女「え？」

冷蔵庫から残り物を取り出し、電子レンジで温める音。

男の声「インドはどう？俺たち、カレー好きだし」

女「どうしてそう、変なとこばっか行きたがるの？」

男「(現れて) ガンジス川は水浴びしていると、死体が流れてきたりするんでしょ？ド

ラマチックじゃない？生と死の、狭間を感じようよ」

女「(やや不機嫌に) 新婚旅行で？」

男「そう。新婚旅行はある意味、儀式なんだよ。通過儀礼っていうか、二人の人生の旅の、メタファーなんだ。だから、生と死を感じられる、特別な場所へ行こうよ」

男、服を脱ぎ始める。



女「ちよつと、ここで脱がないでよ」  
男「見たくない？」  
女「見たくない。向こうで脱げ、変態」  
男「そうじゃなくて、ガンジス川」  
女「見たくない」  
男「そうかあ」

男、豊んだ洗濯物の残りを持って、風呂場へ去る。女、急に寒気を感じて、うずくまる。

女「寒気がして」うー」  
男の声「外も強風だな」  
女「え？」  
男の声「風」  
女「ああ、まだ雨は降ってないけど」  
男の声「祭り、中止かな？」  
女「あの風じゃできないんじゃない？」  
男の声「明日の午後、空いてただけだな」  
女「何、祭りなんか興味あったの？意外」  
男の声「今年は神輿担ぐつもりだったのよ」  
女「え？海で？裸で？」  
男の声「うん」  
女「こんなに、寒がりなのにな？」  
男の声「松明何本も掲げるから結構暖かいんだって」  
女「担げないでしょ？私たちは」  
男の声「それが誘われたんだよ沼上さんに」  
女「え？嘘」  
男の声「最近はさ、昔からの人なんてもう、老人ばっかじゃない？新しく入ってきた若い人も入れていこうって、そういう感じらしいよ」  
女「若くもないけどね、私たち」  
男の声「でも夫婦だから」  
女「あ、そういうこと？」  
男の声「ようやく、このままだと、祭りそのものがなくなっちゃうんじゃないかって、危惧するようになったってことじゃない？」  
女「今さらねえ」  
男の声「俺もさ、せっかくこの町に住み始めたんだから、ここの祭りを、後世に伝える義務を果たしたいんだよね。それこそ、生と死の、狭間を感じる儀式を」  
女「まつ、うちは一代だけかもしれないけど」  
男の声「そう言うなって」

女「伝統のお祭りだったって、たかだか七、八十年の伝統じゃない。そんなの馬鹿みたいにありがたがって。大体神輿にさ、未婚の年女乗せて激しく揺さぶるって何？」

男の声「だから、言うなって」

女「新しい人排除してきたくせに、急に仲間増やそうなんてさ。役割終えたら消えちやえばいいのよ。祭りも、町も」

男の声「でも実際なくなっちゃったらさみしいもんだよ。こういうのさ」

男、バスタオルをふんどしのように巻いて現れ、

男「裸！」

女「馬鹿！入って来て早く」

男、去る。

女「子どもだわ」

男「(現れて) え？誰が子ども？」

女「(驚いて) 早く入って来て」

男「出勤前に、する？」

女「しない」

男「だよね。しないしない (去る)」

女「、、、ほんと、、、」

シャワーの音が響く。女、自分のバッグから、袋を取り出して、その袋から、買ったばかりの少しセクシーなビキニの水着を取り出す。服の上から合わせてみる。さらに、着ていた服をめくって、お腹を出してみる。

女「無理かな、これ」

女、腹部に冷えを感じる。水着を、バッグと一緒にソファアに置き、ベッドの上にあった毛布を羽織って、うずくまって座る。シャワーの音が響く。女、リモコンを手に取り、エアコンの温度を上げる。ブレイカーが落ちて、停電。

暗闇の中。

男の声「停電？」

女の声「ブレイカー(落ちた)」

男の声「え？」

女の声「上げすぎた、エアコン(の温度)」

男の声「ブレイカー上げられる？」

女の声「、、、無理。なんか動けない」

男の声「え？」  
女の声「ごめん。お腹が」

男がゴサゴサする音。しばらくして、ブレイカーが上がり、電灯が点く。女がうずくまっている。男は、下半身にバスタオルを巻いた状態。

男の声「大丈夫ー？」

女「、、、」

男（現れて）おい、大丈夫？

女「うん」

男「風邪？」

女「ううん。冷えるの。お腹」

男、リモコンを手に取り、エアコンの電源を入れ、設定温度を少し下げる。

男「仕事、休めるかな？」

女「大丈夫だよ」

男「大丈夫そうじゃないよ？」

女「お腹が空きすぎただけかも」

男「痛いとかじゃないんだね？」

女「うん、冷えるだけ」

男「とりあえず、カレーもつかい温めるね」

女「シャワーは？」

男「まだ時間あるから」

女「服着て。風邪引くよ」

男、去る。ブーンという電子レンジの音が響く。

男（現れて）起き上がれる？」

女「うん」

男「一旦服着る。（去る）」

女「ごめん」

男の声「あれ？俺、着替えどこ置いたっけ？」

女「お風呂場の方を持っていったよ」

男の声「あ、あった。あった」

男、服を着ながら、現れる。

男「寒いからね。風邪引いたんだよ。大丈夫？」

女、体を起こすと、

男・女「(同時に) え?」

女のお腹が(赤ん坊を妊娠したかのごとく)はちきれんばかりに膨れている。

男「、、、」

女「、、、」

男「どういうこと?」

女「わかんないよ」

男「帰ってきた時、普通だったよ?」

女「私が聞きたいわよ」

男「便秘?」

女「は?」

男「便秘じゃないよね?」

女「なんでそうなるの?」

男「そうじゃないなら?」

女「何よ?」

男「からかってる?俺のこと」

女「まさか」

男「でもさ」

男、女のお腹を見る。

男「え?突然そんなに膨れるってなんだよ?」

女「私だってわかんないから」

男「、、、かゆみとかは?」

女「え?」

男「なんか食べてアレルギー反応とか。前に言ってたでしょ?帰りについてコンビニで新商品買って食べちゃったら、アレルギー出ちゃったって」

女「何も食べてないよ今日は」

男「でもその膨み、異常じゃない?」

女「かゆみとかは、ない。ただ冷たいの。お腹が異様に冷たいっていうか」

男「冷たい?」

女「うん。ひんやりして、なんか重たくて」

男「やっぱり便秘なんじゃないか?俺よくあるからそういう時。急にひんやりして、

とおおってなる時。トイレすぐ近くになくて大変なんだよそういう時」

女「違うのよ。そういうんじゃないんだよ」

ト、男、女のお腹に触ろうとする。

女「やめて」  
男「え？」  
女「さわられたくないの」  
男「なんで？」  
女「なんか、、、」  
男「何？」  
女「手、温かいでしょ？」  
男「俺の？」  
女「そう」  
男「そりゃあ温かいだろうけど」  
女「溶けちゃいそうで」  
男「はい？」  
女「だから溶けちゃいそうなのよ」  
男「何が？」  
女「お腹の、中」  
男「、、、何言ってるの？」  
女「、、、」

男、女のお腹に触ろうとする。

女「やめてったら」  
男「確認したいんだよ」  
女「何を？」  
男「それがなんなのか」  
女「私の、お腹よ」

男、女のお腹に触ろうとする。

女「やめて」  
男「さわらせてよ。なんだかわからないまま、このままにしておけないよ」  
女「さわったら、わかるの？」  
男「わかんないかもしれないけど、わかるかもしれないじゃん」

男、女のお腹に触ろうとする。女、男の手から逃れる。

男「さわらせるって」  
女「嫌なの！」

間。

男「でも、、、じゃあ何なんだよ？」

女「、、、」

男「何なんだよ？」

女「、、、」

男「さわらせて」

女「、、、」

男「一瞬だけだから」

男、女のお腹に触ろうとする。女、今度は逃げずに、男に自分の膨らんだお腹を触らせる。男、触るがすぐに手をお腹から離して、

女「(氷が少し溶ける感じ) あっ」

男「(驚いて) 嘘？え？まじ？」

女「何？」

男「いや、ほんとに冷たいから、、、氷みたいに」

女「今、なんて言った？」

男「なんてって、、、氷みたいだって」

女「それよ」

男「どれ？」

女「氷」

男「、、、(何も言えない)」

女、自分のお腹に、ゆっくりと触る。

女「ふう(息を整える)、ふう(息を整える)」

男「、、、」

女「これ、、、氷かも」

男「はい？」

女「氷だったらどうする？」

男「え？何言ってるんだよ？」

女「だって、普通じゃないのよ。お腹の中の毛細血管が、少しずつ、霜柱みたいに冷えていってるの」

男「なんだよ？それ。お腹の中に氷？それこそ、そんな急にできるわけないだろ？」

女「だって、そうなのよ」

男「、、、」

女「硬くなかった？」

男「え？」

女「さわった時の皮膚の下。なんか硬い感じしなかった？」

男「一瞬だったから、、、覚えてないよ」

女「硬い感じするの。この中に硬くて冷たいものが、、」

男「身体は、重い？」

女「どういう意味？」

男「何キロの氷？」

女「わかんないよ、そんなの」

男「大体だよ」

女、自分のお腹の重さを量るような仕草。

女「3キロぐらい？」

男、笑う。

男「ふふふ」

女「何笑ってんのよ？」

男「ごめん、、ふふふ」

女「なんで笑うの？」

男「だって、、恥ずかしがってるから」

女「何を？別に恥ずかしがってないから」

男「それ赤ちゃんだよ」

女「え？」

男「赤ちゃん、いるんじゃないの？」

女「え？なんで赤ちゃん」

男「3キロって赤ちゃんぐらいの重さだよそれ」

女「だから、違うって」

男「だって3キロでその膨らみ。ないだろ？他に」

女「、、」

男「ふふふ。大丈夫だよ。安心して。俺、ずっと欲しかったの、知ってるだろ？」

女「赤ちゃんじゃないよ、これ。赤ちゃんなわけじゃないじゃない。そんな急に、できる

わけないでしょ？」

男「でも、氷がお腹の中にできるなんて聞いたことないぞ？」

女「、、、これが赤ちゃんだって言うの？」

男「うん」

女「こんなに冷たいのに？」

男「、、」

男、リモコンを手に取り、エアコンの電源を切る。

女「え？なんで？」

男「いや、だって、、」

女「だって？」  
男「、、、神経質過ぎるよ。深い意図はないよ」  
女「寒いよ私」  
男「でも、気をつけないと、溶けちゃうだろうから」  
女「ちよっと待ってよ。溶けちゃうって、、、お腹の中のこれ？」  
男「、、、うん」  
女「私のことは？心配じゃないの？」  
男「心配だよ。心配だけど、お腹も心配だから」

男、ソファから靴下を一足、手に取り、

男「ほら、靴下」

女「、、、」

男「履きなよ、寒いなら。いや、履かせてあげる」

女「、、、うん」

男、女の足に靴下を履かせようとするが、段々と足ではなく、女の膨らんだお腹に視線を奪われる。お腹を見ながら、口元から笑みがこぼれる。

女「ねえ」

男「、、、(お腹を見てる)」

女「ねえ」

男「、、、(お腹を見てる)」

女「ねえ、ちよっと。ねえ。ねえっしたら」

男「ん？どうした？」

女「どうしたって、、、ずっと私のお腹見てたよ？」

男「嘘？俺、君の足をずっと見てただけだ」

女「、、、ああ(寒さで体が震える)」

男「まだ寒い？」

女「寒いよ。どんどん冷えてく」

男「そのお腹のせい？」

女「、、、多分」

男「(君を) 温めなきゃ」

男、ベッドから毛布を取って、女の肩に巻こうとした瞬間、女のお腹が目に入る。ぼーっとした表情になって、毛布を女の頭にかけてしまう。女の顔は見えなくなり、膨らんだお腹がより強調される。男、口元に笑みを浮かべながら、お腹をじっと見つめている。

女の声「どういふこと？これ」



男「お腹を温めないように、君を温めなきゃいけないから」

女、頭から毛布を取って、

女「なんでよ？え？なんで？」

男「（正気に戻り）え？いや、溶けちゃったら元も子もないだろ？」

女「お腹のほうか、大事だってこと？」

男「いや、そうじゃないんだよ」

女「そうじゃない？そういう態度よ？」

男「そ、そうじゃないんだって」

ト言いながらも、男、再び、女のお腹に視線を奪われていく。

女「ねえ」

男「、、、（お腹を見てる）」

女「おかしいよ。お腹が膨らんだ途端急に。ねえ、聞いている？聞いている？ねえ、聞いてって！」

男「（正気に戻り）え？どうしたの？」

女「わからないの？私のこと、、、目に入らなくなってる」

男「そんなことないって」

女「そんなことあるから。気づいてないの？さっきから（お腹を指して）ここをずっと見てるのよ？」

男「、、、」

女「目つぶって。もうお腹見ないで。お願い。お願い！」

男「わ、わかったよ」

女「私の声聞こえるでしょ？」

男「うん、、、」

女「ちゃんと聞いててね」

男「うん、、、」

女「え？大丈夫？」

男「うん、音がする」

女「はい？」

男「遠くで、どこかずっと遠い海の上で、キューン、キューンって何かか鳴いている音がするんだ」

ト言いながら、男、目をつぶったまま、女のお腹のほうへ耳を近づけて、耳をす  
ます。

男「ふふふ。氷だ。氷が鳴いてるんだよ。キューン、キューンって鳴きながら、今も  
周りの海を少しづつ凍らせている。それで、少しづつ氷自身も大きくなっているん

だ。その氷はね、四十億年前の、原始の頃からの海の記憶を、ひっそりと眠らせながら閉じ込めてるんだ。キューン、キューン。キューン、キューンって」  
女「やめて！」

男、目を開ける。

男「なんだよ？」

女「、、、なんだよ？って。今のどういうこと？」

男「何が？」

女「、、、聞こえるんでしょ？氷が鳴く音」

男「俺、そんなこと言ったの？」

女「言った。覚えてないの？氷が鳴く音がするって。この氷は原始の頃からの海の記憶を閉じ込めてるって、、、」

男「え？」

女「、、、私に変なの？私がおかしくなっちゃってるの？」

男「、、、わからないよ。あっ（女の頭を見て）」

女「何？」

男「白髪？」

女「それは言わなくていいから」

男「じゃなくてさ、、、霜だ」

女「え？」

男「君の髪に霜が」

女「嘘よ」

男「髪の毛が、凍り始めてる？」

間。

女「この（お腹の）、せい？」

男「え？」

女「私、このまま冷えてって、動かなくなっちゃうかもよ？」

男「、、、」

女「（息を吐いて）はー。はー。吐く息も、白くなってない？」

男「気のせいだって。大丈夫だよ。落ち着けて」

女「君が不安にさせるの！」

男「俺が？」

女「さわって。もう溶かしちゃっていいから、（お腹を指して）ここ」

男「ちよっと待ってって」

女「温かい手で温めて。お願い！」

男「今決めんのかよ？」

女「何を？」

男「だから、、、(君か、氷か、を)」  
女「今決めんのかよって何を？」  
男「だって、、、その氷を溶かすってことは、、、」

ちやうど、その時に、電子レンジのチンという音がする。窓の外では、雪が降り始める。

男「とりあえずさ、カレー食べよ？」  
女「、、、」

男、逃げ出すように、台所へ。

男の声「ご飯どれくらい？」

女「、、、」

男の声「軽めにしとくよ？」

女「、、、」

男、お盆に載せたカレーを二皿、持ってくる。

男「食べよ」

男、卓袱台に座って、お盆からカレー皿を降ろす。女、卓袱台のところへ座る。そして、皿を触って、皿の温度を確かめる。

男「どう？」

女「お皿、ぬるいよ」

男「え？」

女「私、身体の中に氷がいるのよ。もっと温かいのが食べたい。温め直して」

男「、、、うん」

男、カレーを持って台所へ。ブーンという電子レンジの音。

女「地球って、本当に温暖化してるの？」

男の声「え？」

女「北極の氷だって、溶ける溶けるって言われてるけど、まだ溶けてないじゃん」

男「(現れて) いやすこい勢いで溶けてるんだよ」

女「大きな時間の流れで見たら、氷河期に向かってるって、なんかで読んだよ」

男「、、、」

女「世界はさ、誰も気づかないうちに少しずつ氷で覆われていってるんだよきつと」

男「、、、」

女「私、どんどん身体が冷えてってる。気づかないうちに私も、シベリアのマンモスみたいに、氷漬けになっていくんだろうか？それで一万年後の新しい人類に発見されるんだろうか？」

男「大丈夫。その前に俺が発見して、温めるから」  
女「嘘だよ」

女、男から視線をはずすように窓の外を見る。

男「どうしたの？おい、どうしたんだよ？」

女「雪」

男も、窓の外の雪を見て、

男「、、、」

女「体温が消えて、手も体も冷たくなったら、生きてても、死んじゃったみたいに思われちゃうのかな？」

男「どういう意味？」

女「体が、氷のように冷たい人間を、君は愛せる？、、、それともまるで、死体みたいだって、思ったりして」

男「思わないから」

女「父の顔を思い出す。最後にさわった時、硬くて、なんか物っぽくて、とても冷たかった。もう絶対、温かくはならないんだろうなああって気がして」

男「なんだよ。もう死んじゃうみたいに言うなよ」

女「私ならあの、冷たさを愛せない。人間がああ冷たさなら愛せない。なのに今、私がそうなってる」

男「、、、」

女「氷のように冷たい私と、今までどおりセックスできる？」

男「なんでそういう話になんだよ？」

女「そういうことなのよ！だってもう、さわってくれないじゃない！」

男「、、、」

女「ほら」

男「さわりたいんだよ」

男、女のお腹のほうに手を伸ばすが、

男「さわりたいけど、、、」

女「、、、」

男「でももしその氷が俺たちの、、、俺たちの、、、」

男、ベッドに置いてあった枕をお腹に入れる。

女「何やってんの？」

男「わかりたいから」

女「何を？」

男「赤ちゃんがいる感じだっつてわかんないのに」

男、台所へ去る。

女「ちよっと」

男、アイスクャンディーを持って現れて、

男「お腹に氷がいる感じなんて、わかるわけないだろ？」

男、アイスクャンディーを齧る。

女「やめなよ、お腹壊すっつて」

男「わかりたいから。これでも俺、わかりたいから！」

女「馬鹿？」

男「冷たっ」

女「知らないからね（お腹壊しても）」

男「恰好は似てるな。でももっと重たいんだよな？もっと硬くて、もっと冷たいんだよな？」

男、アイスクャンディーを齧る。

女「ふざけてんの？」

男「本気だよ」

男、アイスクャンディーを齧る。

女「わかるうとしなくていいから。ただ、さわってよ。溶かして。この氷」

男「わかんなきやさわれないんだよ。（女のお腹を指して）それがどういふことか、わかんなきゃ」

男、アイスクャンディーを食べ切る。

男「あ！」

女「何？」

男「当たり前だ」

女「え？」

男「アイスクャンディー、、、もう一本取ってくる」

男、去る。

女「それそういう意味じゃない。お店行ったらもう一本って（ことだから）」

男、もう一本、アイスクャンディーを持って現れ、それを全て食べ切る。

男「、、、」

女「どうしたの？」

男「どうしよう？」

女「え？」

男「やばいかもしれない」

女「やばい？」

男「冷えた。（下半身を指し示して）ここが」

女「馬鹿。だから言ったでしょ？お腹冷やすって。アイス二本も食べるから」

男「違うよ」

女「え？何？」

男、お腹に入れてあった枕を取り出そうとするが、

男「、、、お腹じゃない」

女「はい？何言ってるの？」

男「、、、俺のアソコが」

女「アソコ？」

男「アソコだよ！」

女「、、、」

男「アソコが、、、氷みたいなんだ」

女「どういうこと？」

男「冷えて、凍って、カッチンコッチンになって。氷のピラミッドみたいになって

固まっている。ほら」

男、ぎこちなく歩いて見せる。

男「(短歌を詠むように)ガニ股の歩みの先に見え隠れアソコが凍るオスの悲しみ」

女「馬鹿」

男「俺も馬鹿だと思う」

女「、、、動かして、溶かせないの？」

男「え？」

女「男の人は自分で動かせるでしょ？自分で動かせば少しずつ（溶けるんじゃないの？）」

男「そんなことしたら、折れる可能性が」

女「そのアイスクャンデーだって、そんな簡単にポキッと折れないでしょ？大丈夫よ」

男「アイスクャンデーより細いもん」

女「馬鹿。変なこと言わないでよ」

男「苛立って）だってそうだろ？」

女「知らないわよ」

男「苛立って）知ってるじゃんか」

女「そりゃあ知ってるけど、、、」

男「、、」

女「、、」

男「アソコの中に氷がいる」

女「ええ？」

男「すごく冷たい。もう体がそのまま消えてなくなってしまいそうな空っぽな冷たさ」

女「、、」

男「君もそう？」

女「、、」

男「、、」

女、男のアソコに手を伸ばす。男、それを避ける。

男「何するんだよ？」

女「温めようと思って。ただ手を添えるだけ」

男「、、」

女「空っぽの冷たさに負けたくないの。その冷たさのせいで私のこと抱けなくなってるんでしょ？」

男「なんでそうやって悪いほうにとるんだよ」

女「だって、、」

男「抱きたいんだよ、これでも」

女「ええ？」

男「上向きには凍ってるんだ。冷たい君とセックスできるか想像したらちちゃんと、、」

女「結果凍っちゃったらできないじゃん」

男「そうなんだけど」

女「馬鹿」

男「ごめん」

女「、、」

男「もしどんだん冷えて氷漬けになっていって一万年後発見されたら、俺たちちちゃんと夫婦に見えるかな？片方は勃起してて片方は、、お腹が膨らんでて、夫婦に見え

るかな？この二人ちゃんとシテたなって、ホットな夫婦に見えるかな？」

女「ホットな夫婦って」

男「、、、」

女「なんでそんな変なこと、ポンポン思いつくの？」

男「、、、思いついちゃうんだよ」

女「、、、私たちどこへ行くの？」

男「、、、」

女「ねえ」

男「、、、」

女、窓の外を見る。

女「いつの間にあんな、、、」

男も、窓の外を見る。

男「また、思いついちゃった」

女「え？」

男「雪見てたら」

女「、、、」

男「言ってもいい？」

女「、、、」

男「ダメだよね？」

女「いいよ、言って」

男「、、、雪積もるとさ、、、君が掃除した部屋みたいじゃない？」

女「え？」

男「窓の外なのに君の部屋みたい。真っ白で」

女「ここだって私の部屋よ。私たちの」

男「でも俺がすぐ汚くしちゃうから」

女「、、、」

男「昔まだバラバラに暮らしてた頃、あんな感じの真っ白だったよ君の部屋」

女「、、、」

男「壁もカーテンも床の絨毯も白で家具とかもほとんどなくて。小さな緑の鉢植えが

言い訳みたいに部屋の隅に一つだけあって」

女「、、、」

男「、、、」

女「覚えてる？あの頃言ってたこと。子どもの落書きのような詩を書きたいって、君は言ってた。男の子が真っ白い壁に、クレヨンで躊躇なく落書きしたみたいな、そんな詩を書きたいって。覚えてる？」

男「覚えてるよ。それ言った次の日さ、君は子ども用のクレヨンとスケッチブックを



買ってきた。詩はこれに書いてください。壁には落書きしないでくださいって、言  
いながら笑ってた。覚えてる？」

女「覚えてる」

男「初めて一緒に暮らす部屋を選ぶ時だって、俺が落書きしそうだからって冗談言っ  
て、薄い茶色の壁の部屋を選んだじゃん」

女「そうだった」

男「この部屋を選ぶ時だって、真っ白じゃなくて、やっぱりちよつとだけ色が入った  
壁がいろいろ言ってたよ」

女「そうだった」

男「覚えてるよ全部」

女「そっか」

ちようど、その時に、電子レンジのチンという音がする。

女「、、、」

男「、、、」

女「別にのんびりした町だからこの町を選んだわけじゃないんでしょ？」

男「ん？」

女「決めなきゃね。ずっと住むのか。やっぱり（東京に）戻るか」

男「何だよ？急に」

女「三年だもんね（新婚世帯向け）家賃補助（制度）の期間。次何を求められてるか  
は（わかってる）」

男「、、、」

女「この町に住み続けたいんでしょ？住みやすいし海も近いし。変で不思議な祭りも  
あるし、、、今年から神輿担ぐつもりだったんだもんね？町の一員として」

男「、、、」

女「あんな祭りでも守るべきものなんでしょ？君にとって」

男「、、、」

女「私、参加してもらいたくない」

男「、、、」

女「この祭り、嫌い。なんで関係ないあの人たちに子孫繁栄を願われなきゃいけな  
いの？」

男「、、、」

女「子宮って言葉も嫌い。子どものお宮って。すごい言葉だよ。体の中に神社があ  
るってことでしょ？子どもを産まない女は、空っぽのお宮をずーっと持って、生き  
ていってこと？」

男「、、、」

女「決めたのよ私。私たち、子どもは作らないって」

男「いつ？」

女「今日。今」

男「、、、」  
女「、、、」  
男「勝手に一人で決めんなよ。こっちは自分で決めて産めるわけじゃないんだ」  
女「、、、」  
男「一歩前に進むってことなんだよ、子どもを持つってことは」  
女「、、、」  
男「わかってるだろ？結婚して、夫婦が次に一歩進むっていったら、普通はそうだろ？」  
女「何？普通って？何？一歩前に進むって？これすごろく？」  
男「自分の人生で、守るべきものがちゃんとあるほうが、、、わかりやすいじゃんか」  
女「ねえ、わかりやすいって何？わかりやすいって」  
男「、、、」  
女「そんなわかりやすい人だった？わかりにくいから、詩とか書いてたんじゃないの？」  
男「、、、趣味でね」  
女「そんなこと言っちゃうんだ」  
男「、、、」  
女「詩は、君の詩は、趣味じゃないでしょ？」  
男「こんな誰も読まない詩を、俺はいつまで書いてられるんだよ？」  
女「いつまででも書いてよ。私が読んでるじゃない」  
男「君しか読んでないんだよ」  
女「、、、」  
男「俺の詩なんて、君しか読んでないんだよ」

間。

男「違う」  
女「、、、」  
男「俺なんだ。俺自身なんだ、、、昔ほど、自分で自分の詩を信じられなくなってるのが、怖い」  
女「、、、」  
男「俺の詩は、最初から残るべき詩じゃないって、俺自身が思い始めてるような気がして、、、怖い」  
女「、、、」  
男「祈るように書いてたんだ昔は」  
女「、、、知ってるよ」  
男「祈るように、、、別に、詩の神様がどこかにいるなんて思っていない」  
女「、、、」  
男「でも自分の言葉を、自分の詩を、、、ノートに書けば、、、氷が一気に湯気になって、水蒸気になって、、、空に昇っていくみたいに、、、この祈りは届くんだったって、、、どこかに届くんだったって、、、そう信じる事ができてたのに」  
女「、、、」

男「安心したいんだ、もう」

女「、、、」

男「子どもを育てて、守るべきものをわかりやすくちゃんと守って。安心したいんだよ」

女「もう詩はいらないってこと?」

男「、、、書いてんだよ、まだ。ぼーっと何もしていないように見えて、頭の中で書いてんだ。道に立って、赤い（警備の）棒振りながら」

女「、、、」

男「でもね、これで本当にいいのかって。君に似ている俺の息子と娘ってどんな顔だろうって?そんなこと思い浮かべるようになって」

女「、、、」

男「ちっちゃな、君そっくりの丸っこい指を、思い浮かべるようになって」

女「、、、」

男「君、言っていただろ?終わらせられない人だって。前のことがそのまんま残って、散らかっていくって、、、だったら詩なんてもう、終わらせる時なんじゃないかって」

間。

女「いつそ折れちゃえばいいのか、それ」

男「はい?」

女「だって、折れちゃえば、、、抱かれないことに安心できる。たとえこの（自分のお腹を示して）氷が、、、赤ちゃんでも、安心できる」

男「何言ってるんだよ?」

女「君をパパって呼べるもん。君も私をママって呼んでよ」

男「、、、」

女「この子が溶けないように、溶けないように、大切にしていけばいいんだよ。ママとパパで。そうでしょ?」

男「、、、」

女「この氷、私たちの赤ちゃんなんでしょ?君はそう思いたいんでしょう?なら、私はママで。君はパパでしょ?」

男「、、、」

女「ママって呼んでるのに、私を抱くなんて変じゃない?君のそこが凍るってそういうことでしょ?」

間。

男「また、カレー冷めちゃうな」

男、ぎこちない動きで、台所へカレーを取りに行きかけるが、

女「私たち、いつまでカレー好きなんだろうね」

男「え？」

女「このまま歳を取って、二人きりでずっと暮らしながら、白髪頭になっていつてもしかしたら、君はハゲるかもしれないけれど、それでもずっと辛いカレーを、好きなままでいられるのかな？君は私が作ったカレーをすっごく美味しい、また食べたいから冷凍しておこう。そう、いつまで言い続けてくれるのかな？」

男「、、、」

女「カレー食べるたびになんか、チクチクする。辛いのがお腹に、チクチク刺さるの。」

カレーって子どもが大好きなご飯だから」

男「、、、大人だって好きだよ。カレー」

女「でもいつまで？おじいさんになっても？」

男「、、、おじいさんになっても、おばあさんになっても。だよ」

女「ただ見たことないだけかもしれない。おじいさんとおばあさんが二人でカレーを食べる風景。甘口にすれば歳を取っても美味しく食べられる。そうよ。そうに決まってる。決まってるのに、、、」

男「、、、」

女「なんだか想像しちゃうの。私たちの子どもがカレーを美味しく食べる姿を」

間。

女「夫婦ってさ、、、夫婦ってだけじゃさ、家族になれない？」

男「、、、」

女「ずっと二人だけじゃ、家族になれないのかな？」

男「、、、」

女「一歩前に進むとかじゃなくて、、、でも進みたいの、どこかに」

男「おい。手まで凍り始めた」

女「、、、」

男「どうなってんだよ？どうなってんだよ？」

女「私たちがこのまま氷漬けになっていくってこと？」

男「、、、」

女「凍りながら、少しずつダメになっていくってこと？あのカレーがすごく美味しかった記憶だけを残して、少しずつ少しずつ。少しずつ少しずつ(腐っていくように)」

女、男を見つめる。男も女を見る。

男「食べよう」

女「え？」

男「カレー。もう冷凍なんかしないで、全部食べよう。一気に食べよう。食べ尽くそう。そうしたらきつと」

女「きつと？」

男「、、、」

男、台所へ去る。カレーを二皿、持って来て、卓袱台の上に置く。

男「食べよう」

男、一目散にカレーを食べ始める。女、男の様子を見ながら、カレーを一口、口にする。

男「あ、溶けた」

女「え？」

男「俺のアソコが、元に」

女「、、、」

男「、、、」

女「私の氷も」

男「え？」

女のお腹の氷が溶け出す。それは、大雨のように、滝のように溶け出して、渦を作りながら、部屋全体を天井まで満たしていく。男と女は、渦に巻き込まれ、もがきながら、なんとか息をしようとする。男と女、水の中で目が合う。女は、歌を歌う。それは、男が昔書いた詩が、水の中で歌になったのだ。

クラゲになりたいと 君は言うけれど

海の中では 見えなくなっちゃう

カラダを脱ぎ捨てて あっという間に

波に溶けてく 君を追いかけた

伸ばした 指の先に ふれた手は

チクツと 痺れる クラゲの針

海を見つめても 波に目を凝らしても

漂う君の姿は もう透明

空が美しくても 風が優しくても

漂う君の姿は もう見えない もう見えない

やがて、少しずつ、水位は下がっていく。氷の水は全て、部屋の外に流れ出てしまふ。ずぶ濡れの二人は、水の冷たさに震える。二人の足元に、女のビキニが落

ちている。

男「何これ？」

女「ビキニ」

男「ビキニ？結構、派手じゃ（ないか？）、、、」

女「着てもいい？」

男「え？」

女「着てもいい？」

男「うん」

男と女、もう一度、見つめ合う。暗転。

終わり。

---

参考文献

『氷男』 作・村上春樹

『蝶のやうな私の郷愁』 作・松田正隆